

シンポジウム／「うた・語りにおける人称―だれが語り歌うのか」

うた・語りにおける人称

―だれが語り歌うのか―

三浦 佑之

第34回大会シンポジウム（二〇一〇年六月六日）

アイヌの物語文学から 中川 裕

日本文学の文体からみる人称 古橋信孝

琉球の神歌の「人称」 島村幸一

司会 三浦佑之

前年度第33回大会シンポジウムのテーマは「ウタとカタリ」であった。それを直接承けているわけではないが、今年度は、口承表現としてのウタ・カタリにおける「人称」に焦点を絞り、その表現を考えることにした。音声によって発せられる表現においては、「だれ」が歌い、語るのかということが、意識しようがしまいが、形成される表現に大きく関与するのではないかと考えてのことである。

書かれた表現の場合、音声表現がもっている一回性や臨場感といったものを捨象してしまうために、自覚化された語り手や歌い手が表現を統御しているとしても、だれが語り歌うかという点では、かなりあいまいで自在なところがあるようにみえる。ところ

が口承文芸では、生身の発話者が表現されることは寄り添って存在することもあって、発せられることを語り、歌うのはだれなのかという問題をおのずと意識せざるをえないのだと思う。

たとえば叙事詩のなかで「われ」と発せられたとする。その「われ」が、今まさに音声を発している生身の語り手（歌い手）その人でないとするれば、語り歌う「われ」とはだれか。あるいは、なぜ一人称である「われ」と発する必要があるのか、と。いや、その前に「われ」を一人称と決めていいのかという点が問題になるはずだ。最近の、アイヌの口承文芸では、一人称という呼称そのものが検証されなおしている。では、古代ヤマトや奄美・沖縄における歌や語りでは、一人称という説明は可能なのか。

死者が歌い、神が語る表現世界のなかで、死者であり神であるということとはどのように保証されるのか。なぜ人びとは、死者や神の声を聞くことができるのか。口承文芸を成り立たせる根幹に人称を据え、その本質に迫ってみたいというのが、今回のシンポジウムの意図であった。

アイヌ語の人称をひとくりに「一人称」と規定することをうたがう中川裕氏は、アイヌ語の人称の概略を整理しながら、「うた」や「となえごと」で用いられる「ク」が叙述者＝語り手という関係をもつのに対して、物語では「ア」という人称が用いられるが、その「ア」は聞き手に対して、その話の主体となっている人物が、語り手自身とはイコールではないということを示す形式」だといふふうの説明する。どちらも一人称とされる「ア」と「ク」だが、

基本的な位相が違っているのである。

古代・中世の日本文学を対象として人称について論じた古橋信孝氏は、語り手が物語のなかに入り込むことで成り立つ、聞き手をも巻き込んでしまう文体について論じた。たとえば、かな物語において主語が省かれ場面が自在に転換するようにみえる文章が成り立つのは、それが場の表現であり、語り物文芸などにおける語り手の位置といったものを抱え込んでいないからではないかと言う。文章史・文芸史的な視点に立ち、音声的な表現と書かれた表現とのあいだを行き来しながらの考察であった。

「おもろさうし」を中心とした琉球文学を専門とする島村幸一氏は、宮古島狩俣に伝えられる「神歌」における「わんな」（我は）という表現を取りあげながら、この語が「神の名乗り」としての一人称であり、「ばん」のような通常の宮古方言とは異なる特殊な表現であるということを明らかにしていった。また「おもろさうし」においても、「あが」と「わが」という一人称は区別されて用例の交叉はなく、「あが」や「あん」などア系統の一人称は特殊な表現と認められるのではないかと述べ、今後の展開が期待できることを示唆した。

フロアからは、人称だけにこだわることへの疑問も出されたが、場の問題を含めて口承文芸において人称を考えることの必要性、可能性を指摘する発言が多く出された。パネリストを引き受けていただいた三氏と会場にお越しいただいた方々に感謝する。

(みうら・すけゆき／立正大学)